

夢へ舞う 高校生トリオ



フェアリージャパンの高校生トリオ。右から
鈴木歩佳選手、小松美桜選手、竹中七海選手

愛知・岐阜出身「フェアリージャパン」で出場目指す

新体操の日本代表チーム「フェアリージャパン」には愛知、岐阜の高校生3人がいる。今は正メンバース人を追う立場だが、東京で共同生活をしながら、リオデジャネイロ五輪出場を目指して練習を重ねている。



「ライバルだけど、仲間」

フェアリージャパン 団体の9人と、個人の2人が現12期のメンバー。年1回のトライアウトで選考し直す。リオ五輪出場を決めた団体には、主将で名古屋出身の杉本早裕吏(さゆり)選手(20)=日体大=や、岐阜市出身の松原梨恵選手(22)=ALFA=もいる。

名古屋経済大市邨高3年の竹中七海(ななか)17、名古屋女子大高3年の小松美桜(こまつ)18、大垣日大高2年の鈴木歩佳(すずき)16の3選手。4月、東京都北区の国立スポーツ科学センターでは、正メンバースの先輩たちが曲に合わせて華麗に舞う横で、3人はステップを確認したり、クラブを投げ合ったりと基礎練習に励んでいた。鼻血を出した正メンバースが止血のためマットを離れると、竹中選手の名前が呼ばれた。さっと駆け寄って、笑顔で演技に加わる。代役は、アピールの数少ないチャンスの一つだ。159秒と小柄ながら、足先を美しく見せるのが得意。「どの角度から見ても美しい身のこなしができるように、常に気を張っています」。小松選手は169秒とひととき大きい。中学3年時にチーム入りしたが、1年で脱落。高校の部活で実力を磨き、昨秋のトライアウト(試験)で返り咲いた。「以前の自分とは違う」。課題は体の硬さ。風呂上がりに一人でストレッチをし

ながら、日の丸を背負う自分をイメージする。鈴木選手はチーム最年少。難しい動きに苦戦していると、周りで笑いが起る和ませ役でもある。中学3年で親元を離れた時は、寂しくて頻りに家族に電話した。コッをつかむのがうまく、15歳で正メンバースに。だが、昨年9月の世界選手権の直前に外され、自宅のテレビでチームの銅メダル獲得を見守る悔しい思いをした。「マットに立ったら、どんなときも笑顔でいたい。五輪に出られるまで努力し続けたい」。メンバースは全員、練習拠点の同センター近くで共同生活を送る。朝から晩まで一緒に過ごし、休日も結局、「高校生トリオ」で一緒に買い物に出かける。3人に互いのことを尋ねると、「ライバルだけど、大切な仲間」と口をそろえた。国際大会の結果などをもとに、リオで演技する5人が決まるのは6月。山崎浩子・強化本部長は「それぞれに魅力がある。まだまだ若い選手たち。日々の積み重ねを大切に、もっともっと頑張ってもらいたい」と期待を込める。(高岡佐也子)

※ この記事及び写真は朝日新聞社の許諾を得て転載しています(承諾書番号 A16-0305)